

傷病鳥獣保護鳥類（トビ、フクロウ）における血中ガス分析について

○田中宗平，木戸伸英，近江谷知子，上手裕子，森角興起，内堀杏子
（横浜市立金沢動物園）

血液ガス分析は通常、動脈から採取した動脈血を用い測定する。組織の酸素化、換気状態の把握、酸塩基平衡障害、代謝異常などを評価するうえで非常に有用な診断手段である。しかし、獣医臨床においては動脈血採取が困難であることから利用は限局的である。そのため、動脈血の代替として、検体を採取しやすい末梢静脈血の利用の検討がなされてきた。過去の報告では末梢静脈血中の pH、 P_{CO_2} 、 HCO_3^- 、BE に関しては動脈血値と高い相関がみられ、有用性が示唆されている。しかしながら、鳥類における血液ガス分析の報告は少ない。今回、傷病鳥獣保護事業で保護されたトビ 28 羽およびフクロウ 4 羽における血液ガス分析を実施する機会が得られた。

トビとフクロウでは pH において差がある傾向がみられた。また、フクロウにおいては哺乳類の場合、重度アシデミアとして臨床症状を呈すとされる値に達していたが、臨床症状は見られなかった。通常、哺乳類の pH は 7.35 から 7.45 の範囲で厳密に調整されている。今回、フクロウにおいて認めた重度アシデミアは臨床症状が出ていないだけで疾病が潜在的にあるのか、もしくはフクロウにおいて恒常性はアシデミアの範囲内で調整されているのかなど、様々な検討が必要であると考えられる。